養老孟司・内田樹・平川克美 ラジオデイズ対談（2007）より

平川　今言われてる教育改革って、教育をビジネス化しようとしてるんだよね。すべて効率化原理でやろうとしてるんだけど、まったく教育とは相入れない。

内田　彼らが考えてる「標準的人材育成」って、そんなのホントに使えないって。あんたたちが欲しがってる人間をもし作ったら、採用した後に「何だこりゃ!?いったい!?」って文句言うに決まってる。

平川　そうかな？文句言うかな？

内田　だって使えないもん。どんどん視野狭窄の人間になっていくんだよ。

平川　いや、そういう人間を使えるようにしようとしてるんじゃない？職場なんかが．．．。

内田　いやー、使えないと思うよ。基本的に自己利益の増大を最優先する人間を作ってもしょうがないじゃん。

平川　そうじゃなくて、単純労働に耐えられる．．．というか、ものを考えない人間を作ろうとしてるんじゃないのかな？

内田　それは作れない！作れませんよーそんなものは．．．（笑）

平川　それが教育だとしたら、大変なことだよね。でも不思議だよね。誰も求めないことをやろうとしていることが．．．

内田　文科省の役人に聞いた話では、いま出てきている改革のほとんどは、政界と財界からのプレッシャーなんだそう。文科省はそんなこと求めてない。要するにコストパフォーマンスのよい人間を提供しろってこと。僕に言わせれば「そんなことしたら、コスパ下がりますよ」って。教育はなるべくいじらないで、玉石混交でぐちゃぐちゃしてる中で育った方が、どんなところに行っても使い物になる人間に育つんだから．．．。そんな当たり前の経験則が分かってない。それが不思議．．．。なんで企業経営者がそんな標準化された人間を求めるのかが分からない。

教育特別鼎談　灘中・灘高 校長・教頭に聞く（2022）より

教頭　教育の本質は、一人ひとりの子どもが自分の個性や才能を自ら伸ばしていく手助けをすることだと思っています。ただ小学校卒業の時点では自分の個性や才能などわからない。だから中学・高校で様々な体験の中で自分が一番好きなこと、やりたいことを見つけるのが大事です。それさえ見つかれば、子どもは放っておいても急速に成長します。教員ができることは、子どもたちの好奇心を刺激する幅広い環境を用意することだと思っています。

校長　本校では伝統的に、学習指導は各教員に完全にまかせて、管理職は一切タッチしません。ただ、本校に入ってくる子はもともと学ぶことが好きな子が多い。そうでないと受験競争で勝ち抜けない面もあるのだと思います。

司会　そんな自ら学ぶ子を育むには、どうしたらいいのでしょうか？

教頭　やはり幼児教育が大事だと思います。たとえば就学前に自然に触れ合い、「自然って面白い、不思議だ」と感じる。その謎について考えたり、調べたりする。そのような体験がすべての学びのベースになります。こどもの好奇心の芽を、親が摘まないことも大事です。

司会　子どもの感性や個性を無視して、国や社会が要請する人材へ最適化するような教育を行うことは、弊害が大きいと思いますね。

教頭　学校としてはある程度、社会の要請に応える必要があります。ただこれからの未来の社会をつくる子どもたちに、国や企業が求めることをそのまま押し付けてはいけないと思います。いま、グローバル人材の育成が叫ばれていますが、グローバル資本主義には様々な問題もある。それに無批判に従うのではなく、自分たちは未来の世界をどうしたいのかを能動的に考え、行動する。そういう人間を育てるべきだと思います。

司会　そんな人間を育てる上で大切なことはなんでしょうか？

校長　逆説的になりますが、自分だけでなく、周囲の人や仲間のことを考え、助け、支え合うことではないでしょうか。